

エリオット劇とギリシャ悲劇

—— 主題上の関連について ——

小 川 清

1

T. S. Eliot は二つの面でギリシャ悲劇を自分の作品の中にとり入れ、その恩恵を受けている。一つはフォームの面であって、*Murder in the Cathedral* 及び *The Family reunion* に於けるコーラスの使用はその最も顕著な例であるが、他にも単純な場面設定、簡潔な筋の展開などにもその影響を見ることが出来る。今一つは、内容の面であって、*The Family Reunion* は、Aeschylus の *The Eumenides* を、*The Cocktail Party* は Euripides の *Alcestis* を、また *The Confidential Clerk* は同じく Euripides の *Ion* を、¹⁾ そして *The Elder Statesman* は、Sophocles の *Oedipus at Colonus* を、夫々下敷きとし、人物なり筋立てなりを巧みに援用している。ここでは特に後者の面での関係を取扱いたいのであるが、単に両者の人物や筋立ての類比ではなく、(両者の類似点の指摘は既に多くなされている) ギリシャ悲劇に取扱われている主題を、エリオットが如何なる視点から、自分の作品の中にとり入れ、展開していったかという問題、つまり主題及び主題展開の類似と相違という問題にしぼって考察してみたいと思う。というのは、そのことを通して、エリオット劇の特質あるいは独自性が明確になるかも知れないと考えたからである。ところで問題を主題の点に限定するなら、当然両者の間に共通の主題をもっている作品が選ばねばならない。*The Cocktail Party* 及び *The Confidential Clerk* は、性格あるいはシチュエーションの借用はあるが、特に Euripides と同じ主題をとり扱っている訳ではない。(例えば *The Cocktail Party* の Reily の “it is a serious matter / To bring someone back from the dead” (p. 63) という科白は *Alcestis* を死者の国から連れ戻す Heracles の役割を思い起させるが、それにつづく “Ah, but we die to each other daily” という言葉が示すように一種のアレゴリカルな筋立ての借用に過ぎない。また *The Confidential Clerk* の Colby が Sir Claude に言う、“You knew your inheritance. Now I know mine.” (p. 130) という科

1) Colby と Lubasta の関係の類似が Menander の *The Girl who Gets her Hair Cut Short* に見られるとも云う。D. E. Jones: *The Plays of T. S. Eliot* p. 158 参照

白は Ion が最後に受入れた ‘fine inheritance’ のエコーを持っているが、Colby の言う inheritance は Ion の場合とは異なり、全て精神的なもので、これまたアレゴリカルな筋立ての借用である）それに対し *The Family Reunion* と *Eumenides*、*The Elder Statesman* と *Oedipus at Colonus* の間には、エリオットの劇がいずれも現代のシチュエーションになっているにもかかわらず、ある共通の主題——罪というか、人間存在にまつわるある暗いものが両者共に取扱われていることに気付く。従ってここでは、この二つの作品を中心に、考察をすすめていくことにする。

2

The Family Reunion が *Eumenides* に基づいていることは、エリオット自身が、*Poetry and Drama* の中で述べたこともあって、一般によく知られているが、エリオットは E. Martin Browne への手紙の中で、‘Harry’s career needs to be completed by an *Orestes* or an *Oedipus at Colonus*!’²⁾と書いており、その後 *Orestes* 物語に基づく劇が書かれなかったことから、この言葉は、*Oedipus at Colonus* に基づく彼の最後の作品 *The Elder Statesman* によって果されたということになる。従ってこれら二つの作品は、その間に可成りの年月の距たりはあるが、特に一對の作品として取扱うことが許されるだろう。ところで、エリオットが、Harry の後篇を、もとの素材と異なる *Oedipus at Colonus* によって書くことを暗示し、また事実書いたのは何故であろうか。というのは、Aeschylus と Sophocles では、作風の上でも、思想の面でも、可成りの相異があり、また夫々取扱っている事柄も *Orestes* 物語と *Oedipus* 物語では全く別個だからである。その関連として一つ考えられることは、*Oedipus at Colonus* では、Oedipus が放浪の果に、最後に辿りつく場所（この劇の始まる場所）が、*The Eumenides* に出てくる Furies を祭った社となっており、彼女らの恵みを祈り求めている (l. 83~l. 110) ことから推して、Sophocles は、Aeschylus の作品の復讐の女神から恵みの女神への転身の物語をふまえて書いている訳で、エリオットはあるいはその点を心に留めていたかも知れない。しかしそれは余りにも小さな事柄であって、理由としては不十分なように思われる。むしろ、エリオットは、それぞれの作品の大きな相違にも拘わらず、そこに取扱われている事柄の共通点に目を向けたと見るべきだろう。そしてその最も重要な共通点は、人間の犯す罪——そこから発する過去の呪詛を主題としていることである。*Orestes* の場合、過去の呪詛は、彼の母親殺しの罪を責めたて、舞台の上にコーラス役として登場する復讐の女神達 Furies によって、極めて具象的に表現されており、

2) Quoted by F. O. Matthiessen, Third Edition, p. 168

一方 Oedipus の場合は、父殺し、母親との近親相姦という過去の罪が、現在の悲惨という形で、悲劇的に表現されている。そしてこのような主題の結末としては、Oedipus の死を以って終る *Oedipus at Colonus* の方がより暗示的であるということが、後の作品を Sophocles に基づいて書いた主な理由ではないだろうか。³⁾ 尚 *The Family Reunion* と *The Elder Statesman* を一対の作品と書いたが、後者は単に前者の主人公の後半生をとり扱ったものではなく、(Lord Claverton は老いたる Harry ではない)、むしろ *The Eumenides* と *Oedipus at Colonus* が共通点をもつと、パラレルに、同じ主題の繰返しであり、ただ後者がより人生の完結に近づいているという意味で対をなすのである。エリオットは、ギリシャ悲劇に於けるこの過去の呪詛のテーマを、最初 *The Family Reunion* の中で、Aeschylus に倣って、Furies (Eumenides) を直接舞台に登場させることによって、客観化しようと試みたのであるが、実際の舞台の上では、彼女らの取扱いに困り、‘They must, in future, be omitted from the cast, and be understood to be visible only to certain of my characters, and not to the audience!’⁴⁾ と述べている程であるが、この反省からであろう、*The Elder Statesman* では、主人公の過去の罪を、過去の亡霊の様に立ち戻って来た実際の人物(昔の友 Gomez 及び昔の愛人 Mrs. Carghill) の姿で表現しており、前作のプロットの継承という意味でも、これら二つの作品は深いつながりを持っているのであるが、いずれの場合も、その様な古い主題を20世紀の文学の中に持ちこみ、実現しようとしたという点に、特に注目する必要がある。

3

次に、それではエリオットは、何故、自分の作品の素材として、Orestes あるいは Oedipus をえらび、そこに共通に含まれている、罪あるいは呪詛の主題を取り扱ったのか。Orestes あるいは Oedipus が既に人口に膾炙しているということ、また夫々の古典の作品が劇のパターンとして確立して素材として有利であるなど、まずドラマツルギー上の理由が考えられるのであるが、エリオットは、むしろ下敷を出来るだけ隠そうと努めているのだし、また古典のプロットに厳密に従っている訳でもなく、とは云え作劇上の理由を認めない訳ではないが、むしろこの場合は思想的な動機が大きく働いているといえるのではなかろうか。もっとも思想的な理由ということになると、それに言及することは単なる推測に陥る危険がつ

3) *The Elder Statesman* には、盲目の Oedipus を導く Antigone の献身的愛にヒントを得たとと思われる愛の主題があり、それが今一つの大きな理由であるが、前作との関連からいえば、矢張り罪の主題に重点を置いて考えらるべきであろう。

4) On Poetry and Poets p. 84

きまとうのであるが、エリオットの詩や評論にあらわれる一般的な思想傾向を考慮しながら考察してみることにする。

エリオットは、*The Waste land* によって世に出てからも、現代の不毛と絶望を凝視し続けて来た詩人であるが、その様な彼にとって、最大の思想的課題は、当然、この不毛と絶望から如何にして脱出するかということであったと考えられる。そのためには、先ずその由ってくる原因を、みきわめる必要がある訳だ。*The Dry Salvages* の中に次の様な一節がある。

It seems, as one becomes older,
That the past has another pattern, and ceases to be a mere sequence—
Or even development: the latter a partial fallacy
Encouraged by superficial notions of evolution,
Which becomes, in the popular mind, a means of disowning the past.⁵⁾

三行目の the latter つまり発展とは進化という皮相な考えがさかんにした全体を見ぬ謬見で、それが世人の心には過去を否認する一手段となっていると、エリオットは言うのである。ここには明らかに、近代ヒューマニズムに対する批判があると見てよからう。近代ヒューマニズムは時間の連続(sequence)に対する信頼の上に成立つ進化とか発展という概念に基づいている。そしてその特徴は、人間性の無限の向上進歩を信じる楽天的な人間観にある。エリオットは実はそこに、現代の行き詰りの根本的な原因を見ている訳だ。*Four Quartets* で、エリオットは時間について近代人の信奉する進化あるいは発展の概念とは全く異なる another pattern を展開してみせたのであるが、劇では、それとも無関係ではないが、主として楽天的な人間観に対するアンチテーゼとしての人間理解を表現してみせたといえるだろう。近代は、人間の罪とか問題性を回避し或るいは無視することによって、理想主義的ヒューマニズムを形成して来たが、第一次大戦によるヨーロッパ文明崩壊の危機感を契機として、その衣がはがれ、人間の根源的問題が、再び顔を出して来たのが現代だと云えようが、エリオットはいち早く、鋭敏にそのことを感じ、問題提起者としての役割を担うと同時に、そこからの脱出あるいは救いの道を自らの課題として、生涯探求しつづけていったことを、彼の詩あるいは劇の作品を通して感じるのである。ところで、ギリシャ文明は、通常、ルネッサンスを通じての近代ヒューマニズムの母体と考えられ、一般に明るい人間像と結びつけて理解されているのであるが、エリオットが、ギリシャの作品を素材として用いたということは、当然、その様な常識とは異なる見地に立っていたといわねばならない。つまり古代の

5) Collected Poems p. 208

ギリシャ人が知りそして近代人が勝手に無視し忘却していたものをそこに見たのである。ギリシャ悲劇の中の、例えば Orestes 三部作に於ける罪と死と悲惨あるいは、Oedipus の生れて来ないことが最も良いことだというあの暗いペシミズムなどは、明るいギリシャ的人間という常識的なイメージとは、凡そかけ離れたものである。而もそれは、新しい光を当てられつつ、基督教の中に継承あるいは吸収され、エリオットの所謂ヨーロッパ的精神の基調をなす伝統的人間観を形成したのであった。エリオットが、Orestes あるいは Oedipus を自分の作品の下敷として選んだということ、殊に人間の罪と呪詛にまつわる復讐の女神を登場させたということは、単に劇の技巧としてだけではなく、近代の人間観を暗黙の中に批判しながら、それとは対蹠的にヘレニズム・ヘブライズムを通じて流れるこの様な伝統的人間観を強調するためではなかったかと思われるのである。

4

勿論、エリオットは、古典の人物、筋書きあるいは主題を、そのまま、自分の作品の中に持ち込んだのではない。そこにはエリオット独自の展開がある。従って次に、その古典がどの様に変えて用いられているかを見なければならない。

前項に於いて、人間の根源的問題が顔を出して来たのが現代であり、それは大戦によるヨーロッパ文明崩壊の危機感を契機としてであったと述べたが、今一つの契機として、それ程には目立たないけれども、現代の深層心理学の発達に伴う、人間の非合理的側面の認識を挙げることが出来るかもしれない。エリオットは、作品の随所で、心理学に対して深い関心のあったことを示しており、*The Cocktail Party* などは、その劇全体の引廻し役として精神医を登場させている程であるが、彼は、この深層心理学を用いることによって、古典が取扱う人間の問題性を極めて現代的な課題として再現して見せたのである。*The Family Reunion* の Harry は、実際には Orestes のように殺害の行為を犯していなくても、船中で妻を海に突き落したという自意識にとらわれていて、他の者（劇中では叔父叔母達）から見ると、明らかに精神医の対象となるべき人物となっている。彼が無意識の中に妻を取り除き度いと希っていて、その希求が彼の頭の中にそのような妄想を生んだのだという解釈は、余り明敏でない叔父の Charles でも直ぐに考えつくことであるが、（彼はこう言う。I suspect it is simply that the wish to get rid of her/Makes him believe he did.）エリオットは更に、Harry の父もまた妻の殺害を図って果さなかったことがあるという事実を明かすことによって、人間の中に代々潜む、ある救われ難い無気味なものを描き出す。Orestes の近親殺害の悲劇は、ここでは、行為よりはむしろ人間の中に深く潜む犯意の葛藤として、心理学的に現代化されているのである。*The Elder Statesman* の Claverton の場合は、Harry の様に遺伝

的な罪ではないけれども、本人が忘却してしまっていた、言わば無意識の中に埋れていた、過去の罪が、次第に明るみに出されていくことによって、それが埋もれていた時に、その徴候として漠然と感じられていた不安、孤独、虚無感から救い出されるという設定になっている、これも Oedipus の救いの心理学的現代版ということが出来よう。

しかし反面、エリオットは心理学の効用と同時にその限界をも心得ていたようである。彼によれば心理学は、長い間基督教には知られていて、而も近代人には忘れられ無視されて来た真理を復活すると同時に、その真理を基督教の言葉が最早通用しない現代人にも理解出来る形と言葉に置きかえたという点で大いに有効ではあるが、心理学はただ事実を記述するのみであって、人間の責任を問う 倫理的宗教的課題の 代りをするものではないというのである。⁶⁾つまり心理学は、エリオットにとって、古典の主題となっている人間の暗い側面に、現代風の照明を与え、現代人にも理解出来る形で表現するための ‘indispensable handmaid’ だった訳で、エリオットは、古典の主題は、単に心理学的解明だけでは尽し得ない人間存在の本質にかかわる宗教的課題であると見做しているのである。従ってその面で、エリオットが主題展開をどの様に行っているかを、更に追求してみなければならない。エリオットの劇では、Orestes や Oedipus が犯したあるいは犯さざるを得なかった近親殺害のような行為が、そのままの形ではあらわれて来ない。行為としてではなく、先に述べたように、意識として表現されるのである。しかしそれは単なる意識ではなくて、宗教的な罪の意識であり、あるいは罪から生じる意識である。つまりエリオットは、古典に於ける人間相剋の罪業を、倫理的法的理解即ち対人関係に於ける理解から更に一步すすめて、実存的人間状況として、基督教的に言えば、原罪として把握し、表現しようと試みているのである。 *The Family Reunion* の Harry の場合、彼の妻の死は新聞記事では誤って海に落ちた事故死と見られており、また親族達もそう信じていて、法的社会的には何ら責められるところがないにもかかわらず、当の Harry にとっては、飽く迄、自分の罪として深く心に突きささったことなのである。

It goes a good deal deeper
Than what people call their conscience; it is just the cancer
That eats away the self. I know how you would take it.
First of all, you isolate the single event
As something so dreadful that it couldn't have happened,
Because you could not bear it. So you must believe
That I suffer from delusions. It is not my conscience,
Not my mind, that is diseased, but the world I have to live in.

6) D.E. Jones *The Plays of T.S. Eliot* p. 145

The Search for Moral Sanction broadcast in 1932 参照

この罪の意識は癌のように自我を食いつくすものだというのである。これは、いわば死に至る病の自覚であり、かような自覚をもつものにとっては、一つ一つの行為をとり出してはかりにかけける所謂良心も一向に役に立たない、そのすべてを含む世界そのものが、この病にかかっていることを見抜いてしまっているからである。彼は八年の間、世界を放浪するが、彼が行くところすべて、人混みすら砂漠に他ならず、絶えず孤独と不安がつきまとう。それがこの病の症状である。しかし作者はそれを単なる心理的妄想と片付けてはいない。久し振りに帰った故郷に、Harry は求めていた安息を見出すことは出来ないが、その代り、彼の父もまた曾ってその妻を殺そうと図ったことがあるという事実を知ることによって、この病の正体、その实在性と普遍性を見出すことになっているからである。*The Elder Statesman* の Claverton の場合、彼の妻を淋しく死なせたという科白 (p. 85) が僅かに Iocaste の死⁷⁾ を暗示する以外、肉親相剋の悲劇の影はないが、過去の罪を負う人間として描かれている点では、Oedipus と同じである。しかしここでも、行為よりは意識が中心となり、罪は一つ一つの行為としてよりも先ず実存的不安として提示される。

A fear of the vacuum, and no desire to fill it.
 It's just like sitting in an empty waiting room
 In a railway station on a branch line,
 After the last train, after all the other passengers
 Have left, and the booking office is closed
 And the porters have gone. What am I waiting for
 In a cold and empty room before an empty grate?
 For no one. For nothing.

この様な窮極的な空虚感や不安は、医者のおすすめの休息や、身内の者の 'take life easily' というすすめが、殆んど意味をなさない種類のものであり、その空虚を埋めようとする欲求すら奪ってしまう程の、人間存在の根底に横たわるある怖るべきものに基因している。人間はそれに顔を背け、無意識に忘れようと努める。従ってそれは、通常、意識下の世界に沈んでいて、僅かにその徴候である不安、虚無感として顔をのぞかせるのみであるが、エリオットは、自らの知らざる罪を発見した Oedipus の故事にならって、主人公をして敢てその実体を掘り起さしめているのである。これらいずれの場合も、エリオットは、過去に於ける個々の行為そのものよりは、過去を負う人間存在そのものがそれによって滲透されている宗教的倫理的罪性を、意識及び意識下を通じて追究しており、そこに、ギリシャ悲劇の場合とは自

7) Oedipus の母そして後に知らずして妻となり、そのことを知った時自殺する。

ら異なるエリオット劇の第一の独自性があると云えよう。

5

第二のそして更に顕著なエリオット劇の独自性のあらわれは、罪に対する解決の仕方あるいは解決の方向の違いにある。先ず Aeschylus の場合を見よう。 *The Eumenides* には有名な Orestes 裁判があり、Orestes は、陪審員として選ばれた市民の判断と彼らの票が同数に割れた時の議長役の Athene の好意によって、無罪と宣せられ、彼の罪を追求して止まなかった Furies も滋愛の女神として崇められることになり、かくして Agamemnon の死以来繰返されて来た血の呪いに終止符が打たれることになっている。これは、罪業とその悪循環に対する理性あるいは知恵の勝利を象徴するものであろう。一方、Sophocles の場合、彼の人間理解はよりペシミスティックで深い。Oedipus は、彼の欲すると欲せざるとにかかわらず、罪の境遇に陥し入れられているのであって、而も人間の限界の故に自分の力ではそこから抜け出すことは不可能である。Oedipus はしかし、運命に翻弄されながらも、尙も毅然とした態度を持している。彼はそれが自分の責任ではないことを知っているからである。真の責任者は神々であり、従って彼の救いもまた神々の負うものである。(最後に、彼の死ぬ土地が神々の祝福を受けることになっている。) Sophocles は人間の陥っているある救われ難い状況に対する洞察の持ち主であると同時に、その責任を神々あるいは運命に帰することによって、一つの解答を示したのだと云えよう。

我々人間はいつも、身边に起ってくる問題を、理性によって解決しようと図るか、もしくは、運命に帰することによって納得しようとする。その意味では、これら二つのケースは、様々なヴァリエーションを持ちつつ、今日まで生きつづけている思考の二つのプロトタイプを示していると言えよう。エリオットの場合はどうか。彼の場合、前にも述べた様に、罪は行為としてよりはむしろ意識として把握されている。而もそれは、単純な意識ではなく、意識下の世界から言わば悪夢のように浮び上ってくるものであり、孤独、不安、自己喪失感という形をとってあらわれる。Harry は自己の状態について次のように言う。

All this last year, I could not fit myself together :

When I was inside the old dream, I felt all the same emotion

Or lack of emotion, as before : the same loathing

Diffused, I not a person, in a world not of persons

But only of contaminating presences.

このように把握された罪は、知恵や理性あるいは神々であれ、人であれ他者の判断によって解決されるものではない。同じく Harry の言葉を借りて言えば、'lies a little deeper' な

のである。次にまた、エリオットは、罪を人間以外のものに帰するような方法はとらない。人間は、罪が何処より来たものかを知らないが、それが人間の内側に於いて意識されるものである以上、あくまで人間のものに他ならず、神々や運命にその責任を負わせることは無意味なのである。かくして、エリオットは、残された唯一の道として、罪から逃れるのではなく、罪に直面していく方法を選ぶ。

It is certain

That the knowledge of it must precede the expiation.

It is possible that sin may strain and struggle

In its dark instinctive birth, to come to consciousness

And so find expurgation.

罪の解決のためには、先ず罪を知ること即ち罪を意識にまで持ち来らせることが先決問題である。それは当然苦痛を伴う道である。彼は曾つて *The Wasteland Land* の冒頭で、

April is the cruellest month, breeding

Lilacs out of the dead land,.....

と眼覚めの苦痛について歌ったが、現代の虚無と不安と絶望を凝視することから出発したエリオットにとって、この魂の眼覚めの苦痛への志向は、それ以外に如何なる活路もなかった訳であって、従って生涯彼の作品からは切り離せないものとなった。事実、それは驚くべき一貫性をもって、最後の作品に至るまで貫かれているのである。*The Family Reunion* の Harry は、一家の中に潜む罪に敢て直面することによって、真の生へと歩み出す。また、*The Elder Statesman* の Claverton も、過去の亡霊達から逃げるのではなく、それらに敢て直面し、自らの過失を告白する時、生れて始めて生き始めたという実感を得ることが出来る。エリオットは、どちらかといえば、罪の解決そのものよりは、罪に直面していくプロセスの方により強い関心を抱いているように思えるのであるが、Harry 及び Claverton が夫々罪の認知を通して、ある幸福感、やすらぎを得たということは、その方向に真の解決の道があることを暗示していると言えるであろう。

6

エリオット劇の特質ともいえるこのような罪の理解とその解決の方向は、一口で言うとするなら、基督教的であるといえよう。だが、「基督教的」というレッテルのもとに、もし、何か基督教の公式というようなものをきめこんでしまって、‘the process of the mind of

the intelligent believer'⁸⁾ を捨象してしまうとするなら、結局、彼の用いる方法を理解出来ず、彼とは無縁のものになってしまうだろう。そこで最後に彼の立場また態度について一、二のことを想起して結びとしたい。一つは、我々は普通欧米を基督教社会と考えているが、エリオットには、現代は、も早基督教社会と言えるものではなく、基督教の教義や言葉が、一般には古代の象形文字のように、解読不能で通用しないという時代認識があったということである。ここからエリオットの作家としての表現上の苦闘が始まっている。彼がギリシャ悲劇を下敷きとし、また、現代人にも理解される心理学を用いたということは、これまで述べて来た内容上の関連もさることながら、そのような時代認識に基づく苦慮から来ているということも忘れてはならないだろう。今一つは、エリオットは改宗後も、所謂護教家、宣伝家 (public apologist) にはならず、最後まで探究者としての態度を持ちつづけたということである。‘The Christian thinker—and I mean the man who is trying consciously and conscientiously to explain to himself the sequence which culminates in faith, rather than the public apologist—proceeds by rejection and elimination.’⁹⁾ Pascal について言われたこの言葉は当のエリオット自身にも適切に当て嵌まる。彼の思索と探究は、安易な妥協、見せかけの救いに対する徹底的な拒絶によってすすむ。この拒絶のいきつくところ、そこに彼は基督教の真理を見る。劇に於いて、罪の認識、罪との対決を主題としたということは、従って基督教の公式の安易な適用ではなく、かような Christian thinker としてのエリオットの厳しい精神のプロセスから生れ出たものとみなすべきであろう。

[ABSTRACT]

Eliot's Plays and Greek Tragedies

by Kiyoshi OGAWA

This essay is an attempt to make out some peculiarities of Eliot's plays, comparing them with the Greek tragedies on which they are based. It is impossible, however, to deal with every aspect now, so my present study is limited to the theme found in common in his plays and the Greek tragedies.

The same theme can be found in *The Family Reunion* and *The Elder Statesman*, though they are based on the different originals—on Aeschylus's *The Eumenides* and Sophocles's *Oedipus at Colonus* respectively. In *The Eumenides* Furies pursue the

8) The 'Panthees' of Pascal の中の言葉. Selected Essays p. 408

9) *ibid.*

sin of matricide of the hero's, while in *Oedipus at Colonus* the hero's sin in the past is expressed in the form of his present misery. Eliot may be said to have derived his theme of sin or expurgation of sin from these Greek tragedies and have developed it in his plays above mentioned; in *The Family Reunion* the sin inherited in the family as in case of Orestes is revealed, and in *The Elder Statesman* the hero, after confronting his past sin, is saved from it through the love of his daughter just as Oedipus led by Antigone.

Now, what are the differences of his treatment of the theme? One is in his method of development of the theme. He expressed sin not as a deed practically done as in the Greek tragedies but as a state of consciousness and employed psychology as a means to express it. Why? He found psychology of great utility in that it revived truths about human nature long since known to Christianity and before it to Greek tragedians but mostly forgotten and ignored by the modern believers in optimistic humanism and in that it put them into a form and a language understandable by modern people. It was 'the truths mostly forgotten and ignored' that he found in the Greek tragedies and tried to express in his plays against the general tendency of the modern time in order to show a way out of its futility and despair, and psychology was the mighty weapon. He was aware, however, that psychology is not satisfactory. He knew sin is not merely a psychological matter but in itself a religious problem. Hence he described it not only as uneasiness or the feeling of separation or solitude but as something in need of expurgation.

Another difference lies in his way of solution or expurgation of sin. The famous Orestes Trial in *The Eumenides* can be said to be indicative of the victory of reason or merciful wisdom over the curse of bloodshed having been repeated since the murder of Agamemnon; on the other hand, Sophocles showed a kind of relief in Oedipus by ascribing the responsibility to gods or fate. In Eliot's plays sin lies in the hero's mind deeper than can be overcome by reason or wisdom. Eliot rejected Sophocles's way, too, because he knew sin cannot be anything but man's responsibility. His heroes take up another way to inquire into and confront their own sin instead of making their escape from it, and find themselves on the way of expurgation when they have acknowledged it lurking in themselves.

These peculiarities his plays contain come from the fact that he was a Christian

thinker—not a man who merely apply the Christian theory to his work, but a man, as defined in his essay *The ‘Pansees’ of Pascal*, ‘who is trying consciously and conscientiously to explain to himself the sequence which culminates in faith, rather than the public apologist, and who proceeds by rejection and elimination.’